

# 変わりゆく若年層と恋愛

——計量研究の視点から——

東京大学 三輪哲

## 1 目的

本報告は、計量研究の立場から、信頼しうる大規模調査データの解析結果に基づいて、恋愛にまつわる若年層の状況・行動・意識を包括的に検討することを目的とする。特に、交際相手の有無や関係性へと焦点をあてた、趨勢分析をおこなうことに主眼を置く。小林・川端（2019）は、恋愛経験者の減少が、特に若年男性において顕著に進行したと主張するが、その再現性を問う試みでもある。

## 2 方法

実証のためのデータは、以下述べる2つある。まず、「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査」（Japanese Life-course Panel Survey）である。これは、東京大学社会科学研究所によって、2007年以降毎年継続されているパネル調査である。2007年時点で20～40歳の日本居住の男女を対象として、層化多段抽出により標本抽出をおこなった。その後2019年には、2019年時点における20～31歳（1987～1998年生まれ）の層を対象としたリフレッシュサンプル調査も実施した。

もう1つは、「青少年の性行動全国調査」である。こちらは日本全国の中学生、高校生、大学生を対象とした調査で、1974年より6年に一度ずつ実差が継続されてきている。その最新の結果を『第8回「若者の性」白書』（日本性教育協会、2019年）より引用しつつ、過去のデータを二次分析する。それらマイクロデータを資料として、趨勢をとらえるために統計解析をおこなう。

## 3 結果

JLPS データに基づき、成人若年層にかんして、1975～1986年出生コーホート（2007年時点の20～31歳）と1987～1998年出生コーホートとのあいだで婚姻や交際状況の分布を比較した。その結果、両コーホート間では、有配偶率は2ポイント程度しか異ならない。だが、無配偶者のなかで交際相手がいる者の割合は、前者で約41%であるのに対し、後者のそれは約31%であり、10ポイントもの差異がみられた。より若い年代の動向をみるため、性行動調査データによって、交際相手の有無についての回答分布を検討した。すると、長期的には1980年代以降、交際相手がいる者の割合は増加していったものの00年代にピークを迎え、2010年代からは減少してきていることが明らかとなった。そのうえ、交際相手がない者に対して交際相手が欲しいかどうかたずねた質問の回答についても、とりわけ中学生・高校生において、欲しいとは思わない層が増加したことがわかった。これらの諸傾向は、男性のみならず、女性についてもあてはまることが確認された。

## 4 議論

客観的かつ量的に観察する限り、「恋愛離れ」は確実に進んでいるとみるのが妥当であろう。青少年のあいだでの恋愛や性への関心の低下や、それについての男女間の差異の増大も指摘されるが（日本性教育協会編、2019）、それらも恋愛を不活発にさせたりマッチングを難しくさせるものとなりかねない。当日は、さらに詳細な分析も踏まえつつ、日本の若年層における恋愛のゆくえについて議論する。

## 文献

小林循・川端健嗣編、2019、『変貌する恋愛と結婚』新曜社。

日本性教育協会編、2019、『「若者の性」白書—第8回青少年の性行動全国調査報告』小学館。